
無双伝 曹魏天下統一伝

マサムネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無双伝 曹魏天下統一伝

【Nコード】

N4539Z

【作者名】

マサムネ

【あらすじ】

この話は以前投稿した。「無双伝 孫呉天下統一伝」の曹魏バージョンです。少し設定は変わっていますが主人公の名前・能力はそのまま使います。

序章

後漢末期、誰もが乱の兆しを感じていた。朝廷の腐敗、災害異変により人心は揺れた。

先の見えない未来に人々は苦しんでいた。そんな中、太平道の教祖・張角が民の不安を煽り、挙兵する。後の言う黄巾の乱を起こす。朝廷は危機感を感じ各地に義勇兵を募った。ここに乱を機と見て立ち上がった者がいた。乱世の奸雄・曹操、彼は配下を引き連れて戦火に入った。

そして、それを追うように進む集団がいた。その中大いなる志を胸の中に秘めた男がいた。

この物語は曹魏を支えた男の物語である。

序章（後書き）

なんか魏の話を無双でやっていて書きたくなりました。

主人公設定（前書き）

主人公設定です。

主人公設定

姓・龍「リュウ」名・星「セイ」字・皇天「コウテン」

身長・185cm

容態・戦国BASARAの前田慶次と同じ

歳・18歳

好きな物

家族と仲間・修行・料理・酒・女性・舞を踊ること・音楽

性格

「無双伝 天下統一伝」と同じ

生い立ち

生い立ちは転生者だが今回は龍家と言う後漢の時代では有名な家に生まれた。主人公の父から武と気の技をマスターし母と蔡文姫の父・蔡？から戦略や政治を学んだ。「この話の蔡？は後漢の学者では無く龍家に仕えている。」また、蔡文姫とは幼馴染である。のちにその才能を曹操に見込まれる郭嘉とはお互い意気投合し義兄弟の契りを結んである。小さい頃一度曹操たちの所で修行した事がある。その時初期の魏の武将とも顔見知りである。そして、曹操が挙兵したこと聞きつけ、蔡文姫・郭嘉と一緒に曹操のもとへ向った。

夢吉「ユメキチ」

「無双伝 孫呉天下統一伝」と同じ

白竜〔ハクリュウ〕

「無双伝 孫呉天下統一伝」と同じ近くの山奥に潜んでいた伝説とされていた。龍星が山奥に行った時に出会いそのあと白竜は龍星を認め愛馬になった。

武器

赤竜刀〔セキリユウトウ〕・青竜刀〔セイリユウトウ〕

「無双伝 天下統一伝」と同じ

黄巾の乱 序章（前書き）

無双6の魏の話自分は好きです。では開幕

黄巾の乱 序章

黄巾軍が本拠にしている冀州（キシユウ）この地に黄巾軍を倒すため続々と官軍や義勇軍が集結し、対する黄巾軍も防戦の構えを見せあと少しで戦端が斬られえる緊迫した空気が広がっていた。

そして、官軍の一つの部隊が進んでいた。すると近くから声がしてきた。

民1「おーい。た・助けてくれ！」

民2「こ・黄巾軍が俺達の村を襲っているんだ！」

どうやら黄巾軍が村を襲っており民が助けを求めてきたみたいだ。だが官軍は。

官軍「ふざけるな！」と民を突き飛ばした。

官軍「我等は帝の軍！なぜ民みたいな下賤の者たちを助けねば成らぬ！かまわぬ！進軍を続けよ！」と官軍を民達を置いて進軍の速度を上げてしまい見る見る遠くに行ってしまった。すると、後ろから二人の黄巾兵が迫ってきた。

黄巾兵「へへッもう逃げられねーぜ！」

黄巾兵2「覚悟しな直ぐにあの世にいくからよ」と二人は剣を民に突きつけた民は「ヒイ！？」と怯えていた。すると強風が吹き荒れて兵士も民も目を瞑ってしまう物だった。兵士は少し後ろに下がっていた。そして風が止み目を開けてみると目の前に今まで居なかった顔や身体をロープで隠している大きな人がいた。当然、民は行き成り現れた人に目を丸くしていた。すると兵士たちは。

黄巾兵「な・・なんだテメエーは！行き成り現れて！まあ丁度いい、おい！金目の物があれば出しなそしたら命は助けてやるよ」とこんどは突然現れた人物に剣を突きつけた。すると。

???「金目の物はない。ただ狩りに来たただけだ。」声からして男の者だった。

黄巾兵「はぁー！狩りだ？なんだよそんな物此処には居ないぜ。」

???「居るさ弱い者から甘い汁を奪ってエサにしている頭に黄色い布を巻いた獣が」

黄巾兵「なっ！なんだと！」

黄巾兵2「ざ・・ざけんな！」と二人は頭にきて剣を上段に構え振り下ろそうとした瞬間。また風が起った。すると兵士たちの視線が徐々に男からそれていくよく見ると男は青い刃をした。刀を抜刀しており兵士の胴体を両断していた。すると兵士達は声を上げる間もなく上半身が大地に落ち絶滅した。

男はローブのフードを取るって先程の一閃を見て怯えている民達にしゃがんで目を合わせたすると民達は少し引いたが。

???「大丈夫か？」先程の鬼神の如き一閃を放った男が太陽のような笑顔を見て安心していた。すると我に返った民達は。

民1「お願いします！村を村を救ってください！」

民2「お願いします！と二人は男の前で土下座をして頼んだ。すると男は二人方に手を置いた。

???「安心しな、あんた達を見捨てたりしねーよ」と言った。すると二人は天の助けだと思っほどの喜びに満ちていた。すると、後ろから大きな蹄の音がした。後ろを振り返ると白き馬がこちらに向ってきた馬は民達の上を飛び越えた。するとロープがそれから墮ちてきた。そして今日の前にいた男は居なく先程、飛び越えた馬に跨って村の方に向っていた。

・・・

男が馬に股がつて村の入り口の所まで来ると一人の黄巾兵が倒れた民に剣を突き刺そうとしている瞬間、男は赤い刃の刀を抜刀しそれを投げたすると見る見る見る刀は兵士に向かった。

黄巾兵「ぐへっ!？」そして刀は兵士の首に刺さった。それを追い討ちする見たいに馬が兵士に激突しその反動で刀は飛び男の左手に収まった。すると他の兵士達も異変に気付き集まってきた。

黄巾兵「何にもんだテメエは」と兵士が言つと男は馬から下りた。

???「狩りだよ、民を苦しめる賊狩りだ!」と赤き刀赤竜刀で前に居た兵士の首が飛んだ。

黄巾兵2「や・野郎!やっちまえ!」と兵士どもが突っ込んできた。俺は高速移動で突っ込んだ。

ザシュ!

ビシュ!

ザシュ!

ビシュ！と男が兵士どもを抜けて刀を下段に構えると。

兵達「「「グハア！」「」「」と剣は折られ首から血が噴出した。

「「「ハッ！」と今度は横に刀を振った。

兵達「「「ギヤア！」「」「」と数人ほど胴体ごと切断した。

黄巾兵「な・・何なんだコイツは」

黄巾兵2「ば・・化けモンだ！」と言っていた兵士達は次の瞬間。

「「「よそ見るな！」と男の刃が兵士達の首を喰らった。

兵達「「「ウオリヤアアア」「」「」と5人か6人程度が飛び掛つてきた。すると男は高速で回転した。

兵達「「「ギヤアアアア」「」「」と回転で起きた竜巻に飲み込まれた兵士達はぶっ飛ばされた。
すると敵将見たな人物が出てきた。

黄巾将「おうおう、よくも暴れたな。だがいい加減にしるよさも「
さもないと女子供の命は無いってとこでしょ？」そうそう、そのと
うりつてだ・・誰だ！俺が今言おうとしたことを言ったのは！」敵
将は辺り見回した。

「「「後ろだよ後ろ」と若い男の声がする方を見るとそこには数
人の女子供と好青年が一人と美女が一人居た。

「「「人質は私たちが救い出しました。残りの兵も貴方を置いて

逃げていきました。」と美女が言った。

黄巾将「ググググッ!」と歯切れそう言った。

???「さあーてどうする」と男は刀を敵将に突きつけた。すると。

黄巾将「ち・チキシヨーーーー!」と逆上し突っ込んできた。

男は刀を一旦鞘に納めた。

黄巾将「死ねーーーー!」と剣を振り下ろしてきた瞬間。

ヒュアーンと風をきるが如く刀を抜刀した。すると将はただ大地に倒れた。そして男が刀を納めると村には歓喜の声が上がった。

ある者はお互いの無事を喜びある者は家族の無事を喜んだ。

そん中一人の民が男によってきた。

民「ありがとうございますだ!御蔭で村は救われました。所でお名前は何と言ったのですか?」

???「俺かい?俺は」男は空を見上げて言った。

???「俺の名は龍星(リュウセイ)!皆から龍の麒麟児とよんでおる!」

これが魏に龍神ありと言われる男の初めての戦であった。

黄巾の乱 序章（後書き）

他の二人の名前は次回の話と合わせて書こうと思います。では、閉幕

黄巾の乱 拠点イベント（前書き）

今回から無双6あった。拠点イベントを書いていききたいと思います。
では、開幕

黄巾の乱 拠点イベント

龍星 side

あのあと村の人々に感謝された俺達は村の人々のケガの治療に当たっていた。まあ。官軍も今頃進軍しているだろうが、どうせ手間取ってるだろうなあ。あの人は多分気を待っているだろうなあー。

???「キキイ？」と考えていると懷から小猿が出てきて俺の肩に乗った。コイツは夢吉、俺がガキの時からのだちだ。俺が何処に以降とも一緒に来るヤツだ。すると後ろから声がした。

???「どうしたんだい兄弟？そんな難しい顔して？夢吉も心配してるよ」この俺を兄弟と言い左手には打球根「ダキユウコン」を持って柔和な物腰の男。名前は郭嘉「カクカ」俺との関係は義兄弟の仲でそう呼び合っている。本来なら魏に着くのだが何故俺のところにいるのかと言うのは俺が「龍の麒麟児」と噂を聞きつけその折に出会い意気投合して義兄弟の契りを交わした。

龍星「うん？いや、のどかなあーって思っていた。」夢吉を撫でながらそう言った。すると郭嘉はクスクスと笑っていた。

郭嘉「相変わらずだねえでも、ホントは官軍の侵攻の遅れとあの人の動きを考えていたんだろ？」

龍星「ありやばれたか？」

郭嘉「とうぜさ、だてに君と兄弟をやってるわけじゃないよ」と言った。相変わらずの洞察力だなあ

龍星「それで、俺になんか言うことがあるんだろ？」

郭嘉「ああ、あと彼女が頑張って御蔭で村人の治療がもう少しで終わること伝えようと思ってるね」

龍星「おっ！もう終わるのかそれじゃ俺は少し村人達と話してもするか」と俺は郭嘉の所から離れた。

それから数人の村人から感謝の言葉をいただいた。そして、村の一角にケガを負った者が集まる場所に着くと。美女がケガをして村人に手を翳すと光が出て村人を包んでいくするとケガが消えていた。

???「はい、もう大丈夫ですよ」

民「おおおっありがとうございます！」と村人は勢い良く立って走っていた。

???「ふう」と美女は一息ついた。その美女は青を貴重とした長い薄い茶髪に頭には三日月と花を金で作られた飾りを付けていた。この女性は蔡文姫「サイブンキ」俺の幼馴染で親同士が決めた許婚だ。そして結婚も済ませているが、まだ、アッチの方までいつてはいない「アッチとはまあ想像にまかせます。」

龍星「よっ！蔡「サイ」」と俺は元気よく左手を上げて呼んだ。

蔡文姫「あら、龍」と穏やかに応えた。

龍星「治療は終わったのか？」と俺は蔡の近くに座った。

蔡文姫「ええ、あの人で最後よ」と応えた。

龍星「あまり、ムリはするなくらち治療術が仕えても、もとはお前の気でしていることなんだから」

蔡文姬「大丈夫よこれくらい、それに私だって龍の妻です。苦しんでる人を見捨てたりは出来ないわ」と笑顔で応えた。そう蔡も郭嘉も気の修行を受けて。俺と郭嘉は身体強化と攻撃と防御を蔡は治療の方を取得している。だが、気は無限ではない。限界を超えれば自分が死んでしまう恐れもある。すると夢吉が俺の肩から蔡の肩に飛び移って、蔡の頬つぺたを自分の頭をこすり付けてきた。

蔡文姬「ふふふつくすぐったいわ。夢吉」と笑いながらそう言うところ言った。

蔡文姬「龍、この乱が終わっても世の乱れは治まることは無いのかしら？」と笑顔だった。顔が曇ってしまった。だから俺は蔡を抱き寄せた。

蔡文姬「えっ・・りゅ・・龍ノノノいけないはこんな所でノノノ」と急に抱き寄せられたことと村人が見ている前で抱き寄せられて白く輝く肌が急に赤くなってしまった。そして俺はこう言った。

龍星「心配すんな、乱てのは人が起こす者。そして、終わらせる者も人だ。だからこの乱はいつか終わる。いや終わらせるだよそのために今俺達は立ち向かってじゃないか、生きて未来を作るために」と言う蔡はハツとした表情をしていた。

蔡文姬「そうね、貴方はそのために今を頑張ってるのよね。ごめんなさい弱音を言ってしまった」と誤ってきた。

龍星「気にするなって！蔡はやさしい気持ちは俺に伝ってるからだ

からあまり思いつめないでくれ運命はいつも一つじゃないから」と優しく蔡を撫でていた。周りの村人も穏やかな表情でこちらを見ていた。

蔡文姬「あ・・・あの・・・そろそろ恥ずかしいので／／／「ダメ!」なんでダメなのですか!?!／／／／」

龍星「蔡がカワイイ過ぎるのがいけないからだ!」と言うと蔡は困ったよに顔を真っ赤にしてただ抱き締められていた。周りの村人の反応は。

爺「はあー若いね^^」

村人「くああああ!俺もあんな美人さんを抱き締めたい!」

夫「ああ俺もあんな美人の嫁さんがほしかうたなあ」

妻「ほおー、アンタ少し死合いでもするかい」

夫「か・・・母ちゃん字がちがんですけどあああああああ!?!」

うん、何か一人天に逝かれた人がいたなあ。すると郭嘉が声をかけて来た。

郭嘉「はいはい、夫婦中は良いことは分かったからそろそろ出発の準備できたよ」

龍星「ああ、わかったよありがとなあ兄弟」と俺が抱き締めるのやめたら蔡の表情は名残惜しいものに見えた。俺はそれを見逃すはずも無く透かさず。蔡の耳元で「続きは後でね」と言うとボン!蔡が

ら爆発音が聞こえた蔡は駆け足で馬のほうに向った。ホント、カワイイ嫁だね。

そして、村の門に馬が止まっており俺は愛馬の神秘的に白く輝く白竜「ハクリユウ」に跨った。

村長「龍星様たちには村を救っていただきありがとうございました。」と村長が言った。

龍星「いや、人として当然なことをしたまでですよ。」と俺は当たり前のことをしたと言った。すると数人の若者が前に出てきた。

若者「龍星様！どうか俺達も戦に連れて行ってください！お願いしますー！」

若者達「「「「「お願いします！」「」「」「」と言ってきた。

龍星「なぜ、戦に出ると言う」俺は真剣な表情で聞いた。

若者「俺達を苦しめ黄巾どもにしかいしと貴方についていきたからですお願いします！」とまた頭を下げて言った。すると俺は。

龍星「君達の夢はなんだ？」と言うと行き成りのことで若者達は困惑したが一人の若者が言った。

若者「お・・俺は商人なって国を渡り歩きたいです！」と言った。

若者2「俺は！学者になりたいです！」

若者3「オラはキレイな嫁さんが欲しいです！」と続々と自分の夢を言ってきた。

龍星「そうか、皆！自分の夢は大事だ！そのうちに秘めた夢を捨ててまだ俺に付いてくことは本当に正しいとは思えない。だから皆！自分の中にある大事な物捨ててくるなあ大事な物を守るために戦えそれこそが本当の戦いだ！」と一括言うと若者達は黙ってしまった。すると、村長が出てきた。

村長「ではこれを持って行って下さい。」それは一枚の地図だった。

龍星「これは？」

村長「これは此処一体の地図これには黄巾の知らない道もあります。どうか使って下さい。」と俺に渡された。

龍星「わかりました。これはありがたく使わせてもらいます。」と受け取った。

龍星「それでこれで。ハイヤア！」と俺達は馬を走らせた。村から見送りの声も聞こえた。

郭嘉「さすがだね」と郭嘉が言ってきた。

郭嘉「あそこでもし加えていれば相手はもと農民とは言え戦場を経験している。この差は大きいこれでは無駄に命が消えるしこつちも思うように動けなくなるね」と郭嘉は俺が考えていたことを見抜いていた。だが一つだけ足りなかった。

龍星「そうだけど、もう一つあるんだぜ」と郭嘉は疑問的な顔をしていた。

龍星「夢を持って明日を生きようとする者を態々死なせるかよ」と
言って白竜の速度を上げた。

さあてまずは教祖様でもぶつとばしますかね。

黄巾の乱 拠点イベント（後書き）

なんかこちらの方が調子良く書ける。では、また次回！

黄巾の乱 一章（前書き）

本格的に戦の話に入ります。

黄巾の乱 一章

龍星 side

あれから俺達は官軍と黄巾軍が激突している戦場についていた。その間、郭嘉は馬の上で地図を見ていた。そして戦場に着くと予想通り官軍は進軍に苦戦、本隊の方も敵が着てるみたいだ。

郭嘉「どうやら相当てこずってる。みたいだね。しかも本隊が警戒無しに前に来たことで伏兵に襲われているって今の官軍はダメみたいだね」と郭嘉は官軍に呆れた。

蔡文姬「でも、このまま、ほつとしては前線の部隊とも連携が取れず官軍は全滅してしまいます」と蔡も口を開いてそう言った。

龍星「ああ、まずは本隊を助けよう恩を売っとけば後々役に立つかなあ。そのあと前線の部隊と合流して戦況を打開するそれでいいな!」と言うと二人は頷いた。

龍星「それじゃいくぜ!」俺は白竜を走らせた。官軍本隊の方に向くと官軍は苦戦していた。すると馬に乗っていた官軍将に黄巾兵二人が馬に乗りながら斬りかかってきた。俺は刀を抜刀し後ろから一閃

黄巾兵達「ギャアアア!?!」と斬られ馬から落ちた。官軍将は突然のことで驚いていた。

龍星「ご無事か?」

官軍将「あ、ああ助かった。」と無事のことを確認したら。

黄巾兵「てりやあああ！」とまた斬りかかってきたが。

郭嘉「ハアッ！」あとから来た。郭嘉の打球根「大鵬（ダイホウ）」を振り横つ腹を叩き兵士をぶっ飛ばした。

郭嘉「あぶない所だったね」

龍星「いや、そうでもないさ」と軽く応えた。そして次々と黄巾兵が群がってきた。

黄巾兵「テリヤア！」と兵二人が俺に向って槍を突いてきた。だが、当たることは無かった。なぜかと言うと俺はもうそこには居なかった。兵は辺りを見るが居ない。すると上を見ると黒い影が落ちてきた。だが太陽の光で兵は目が眩んでいた。
シャアン！！

黄巾兵「ギヤアアア！」と俺は瞬時に上に飛び落下した勢いで青竜刀・赤竜刀を抜刀し切り伏せた。
俺の基本スタイルは二刀流だ。俺は透かさず切り込んだ。

龍星「ハアアアア！」勢い良く刀を振りかざしていく俺。

黄巾兵「ギヤアアア！」

黄巾兵2「グハアアア！」

黄巾兵3「アバラッ！」次が次ぎえと敵を切り伏せていく。

黄巾達「ハアアア」と飛びかかってきたが。

郭嘉「ハッ！」と後ろから郭嘉の声と同時に五つの球体が飛んでいき。

黄巾兵「ギヤアア」と球体は兵達にぶつかり墮ちていった。

郭嘉「まったく熱くなりすぎだよ！」と自分の後ろに入た敵兵を大鵬で吹っ飛ばした。

龍星「大丈夫さあ後ろはお前が守ってくれるからよ！」と俺も二刀で正面の敵に斬撃を放ち次々と吹っ飛んでいく敵。

郭嘉「フツもちろんさ」今度は郭嘉が大鵬を前に突き出すと球体が高速で正面の敵を吹っ飛ばした。

龍星「それじゃいくぜえええ！」と言うとお互いの体が青く光出した。そして、お互いの得物を大きく振りかざし振り下ろして地面にぶつかった瞬間。

ズドン！？

黄巾達「ギヤアアアアアア！」と多くの黄巾の声と共に俺達の周囲にいた。黄巾達は一掃された。そして、少し離れた所に蔡が傷を負った兵士に「澄響（チヨウキョウ）を持っていた。

蔡文姬「希望の光よ」と言うと美しい旋律と舞から光が放たれる。

それを受けた兵士達の傷が消えていく。すると、黄巾兵達が来たが蔡は澄響を構えた。

蔡文姫「はっ」と弦を弾いて音色が靡いたのと同時に気弾が撃たれそれが当たると。

黄巾兵「グハア！」と倒されていく。蔡は澄響を引き舞で移動しながら敵を倒していった。その美しい音色と舞に官軍兵は釘付けだった。そうこうしている内に官軍本隊に群がった敵は一掃された。

官軍将「助かった。あとで褒美をさすけよう」と言ってきた官軍将

龍星「いいえ、自分達は通りすがりの者なので結構です。では、私達は先を急ぐので御免！」

俺達は馬に跨り一度黄巾の本陣に進む道まで向った。するとそこには落石によって進軍が遅れている官軍がいた。

郭嘉「おやおや、官軍は落石で進軍が出来ずにいるか、多分これは操ってる者がいるようだねえ」

蔡文姫「それではその者を討てば落石はとまりますね」

郭嘉「ああ、そしてその人物はこの落石の後ろにいる」

龍星「なら話は早いや一気に馬で駆け抜けていくここで、時間を使えば敵に勢いを与えることになるからなあ二人とも良いか？」

郭嘉「もちろんさ」

蔡分姫「あなたとなら何処までも行きます。」

龍星「それじゃいざ参らん！」と俺たちは馬の速度を上げた。そして官軍将が前を邪魔してたので飛びこえた。

官軍将「うおっ！？」突然、頭上を馬が通り越したことに慌てて落馬したがすぐに起き上がると俺達に向って。

官軍将「き・貴様等！し・死ぬきか！？」と言ってきたが無視をしていると正面から岩が来たが右に避けるとまた岩。今度は青竜刀を抜刀し岩を斬った。そしてもう少しで抜けるところまで来た瞬間。左上から来た岩が横に当たった反動でこちらに向ってきた。俺は直ぐに反応したが一步遅く岩が迫ってきた。すると球体と気弾が飛んできた。そして岩を砕いた。その球体と気弾は郭嘉と蔡の物だった。そして俺達は坂道を上りきった。その先に怪しげな光を発しながら岩を操る男とその部下がいた。すると男の体から光が消えていった。

張梁「なっ！ま・まさかこの岩の道を駆け上がる者達がいるとは！だが、この張梁！易々と首は渡さん！」と刀を抜刀した。

龍星「へえーあんたが張梁さんか？だったらアンタを討って岩を止めますか流石にあれって良い迷惑だし」と言うと張梁は部下に突撃の命令を下した。俺は二人に後ろに入る様に指示した。

龍星「さあいこうか白竜！」と言うと白竜の身体が稲妻を纏っていた。そして、一直線に走り出した。

黄巾達「「「「ギヤアアアアア！」「」「」」」白竜の突撃に

黄巾達は吹っ飛ばされていった。

張梁「く・くくるなあああ！」と刀で防御しようとしたが俺は

赤竜刀を抜刀して。

龍星「うおおおおお！」

ガウツ！ ドツ！ ボンツ！と最初に刀のぶつかった音がした瞬間。張梁の刀は折れそのまま赤竜刀は張梁を捕らえてそして、首が空高く飛んで行き地上に落ちた瞬間。俺は大きく声を上げた。

龍星「敵将・張梁！龍皇天が討ち取ったアアアア！」

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・

ここは龍星達が二つあった坂道の片方の道そこには青の旗に曹と一文字掲げる部隊がいた。その部隊を指揮する男。曹操この乱を利用し天下に名を上げようとしている者。彼はただじつと部隊を動かさず待っていた。そこに一人の男が来た髭を生やし長い陣羽織風な上着を着て、その顔は歴戦の勇士の顔をしていた。

???「孟徳・・・」曹操を字で呼ぶ男。

曹操「なんだ・・・夏侯惇」と男の名を言う曹操。この男・夏侯惇。曹操が絶大な信頼を寄せる将の一人彼も曹操の名を上げるためこの討伐軍に参加している。

夏侯惇「こちらから攻めないのか？」

曹操「そうだ・・・このまま待機だ。」こちらの道でも落石はあるが少ない量で上手く潜り抜けることも可能で、敵の横腹を突くことが

出来る。しかし、曹操は全部隊を待機させた。まるで何かを待つように。

夏侯惇「孟徳一体お前は何を待っているのだあ」と聞いてくる夏侯惇。

曹操「時を待っている」と曹操は意味あるげな言葉を発した。

夏侯惇「孟徳・・・それはどうい「殿ーーーーー！」なんだ淵騒々しい」夏侯惇が「淵」と言う男

気さくそうな雰囲気を出す男。この男も曹操が絶大な信頼を置く将・夏侯淵である。

夏侯淵「いやいやいや、わりい惇兄！それより殿！先程、物見から報告だと敵将張梁が討たれました！」

夏侯惇「本当か！？一体誰が討ったんだ？」

夏侯淵「そ・・・それが惇兄も知っているだろ？あの龍の坊主がやったんだよ！」

夏侯惇「なに！龍が此処に来ているのか！？」すると曹操が大きく声を上げた。

曹操「全部隊！待機命令解除！これより我が部隊は黄巾賊を討つべく進軍する！」と高らかと叫んだ。そして、部隊は進軍を開始した。

夏侯惇「孟徳・・・まさかお前これ待って」

曹操「ふん・・どうであろっかなあ。さあ！我等も行くぞ続けい！」
と曹操は馬を蹴った。

竜神と奸雄の再会はもうそこまで来ていた。

黄巾の乱 一章（後書き）

最近、寒くなっております。皆さんお体には気を付けて下さい。
では、また次回！

黄巾の乱 二章（前書き）

前回の続きです。では、開幕

黄巾の乱 二章

龍星 side

あのあと官軍全部隊は進軍を再開した。しかし、黄巾本陣に近づくと突如強風が吹きまたしても進軍が出来なくなっていた。

龍星「またか、毎回これだと流石にめんどくせなあ」と俺は溜め息を突いていた。

蔡文姫「だめよ龍。ここでそんな溜め息については」とウチの嫁さんに言われた。

龍星「わあーてますよ。まあ風は術者を潰さないと止まんないし官軍には無理だろうし俺たちで頑張らないとなあ」

蔡文姫「ええ、味方に勇気の旋律を奏でましょう。私達で。」と言う。すると突風が吹き白竜は動じなかったが蔡の馬が突風を諸に食らい暴れてしまった。

蔡文姫「キャ！」と蔡は落馬しそうになったが落ちなかった。

龍星「大丈夫か？」

蔡文姫「え・・・ええっありがとう。で・・・でも／＼／＼／＼」蔡の顔が赤いのは蔡も白竜に乗っていた。しかも俺の前にお互いの身体があと少し動けば触れるぐらいだった。俺は咄嗟に彼女の手を掴み此方に乗せた。すると、郭嘉が来た。

郭嘉「おや、これはお邪魔だったかなあ」と茶化すようにクスクスと笑っていた。蔡は相変わらず顔を真っ赤にしていた。

龍星「茶化すなよ。で、俺たちはどう動く」

郭嘉「そうだね、村で貰った。地図が役に立ったよこれによると南に崖がある。今見てきたけどそこから上がれるし敵の横突ける。」

龍星「よし、俺達はそっちから行こう。」と俺たちは移動しようとした時。

蔡文姬「り・龍そろそろ下ろして貰えます。」と乗っていても身長差があるので上目づかいでこちらを見てきた。だが俺は。

龍星「やーだ」と言って馬を蹴った。

蔡文姬「ええええええっ!？」蔡の声が空に響いていた。

そのあと直ぐに俺達は南の崖に付いた。そこは階段のいように削れていて上に続いていた。

また、ここに来る際、蔡は静かだった。でも、こっそり自分の身体を俺に寄せてきたこと俺は気付いていたがあえて黙っていた。

龍星「へえーこれは見事に階段ができてるなあ」

郭嘉「まあね。さあ愚図愚図してられない。早速登ろう。」

龍星「よっしゃいく」あ・あ・あ・「うん?何だよ蔡」

龍星「ああ、こんなの直ぐに登りきちまうぜえ」

蔡文姫「そうではなく／／／あの／／／どうして私はこの格好なんですか！／／／」と真っ赤な顔をして言ってきた。

龍星「え？問題あるか？お姫様抱っこに」そう俺は蔡をお姫様抱っここの状態にしている。

蔡文姫「もう、知りません！／／／」と顔をプイと向けてしまった。俺はそこが可愛いと思い笑ってしまった。

郭嘉「もう良いかい？行くよ。」と郭嘉はジャンプしながら登り始めた。

龍星「ああ、今行く」と俺も登り始めた。蔡を抱っこしながら。着くと兵は居なかった。流石に蔡を下ろして、その先に進んでいくと敵部隊を発見した。丁度。小山を壁にしておりその後ろは無用心に兵は居なかった。俺達はそこに隠れた。

郭嘉「しかし、いくら何でも後ろを放置とは余程彼等は奇跡の力を信じてるようだ。」

龍星「ああ、だがお蔭で好機が訪れたんだ。有りがたい話さ。」俺が言つと郭嘉は頷いた。

蔡文姫「このまま真っ直ぐ行けば後ろから奇襲が出来ます。しかし、我等は少数これでは奇襲には成りません。」

龍星「大丈夫、大丈夫、ここに困ったときに助かる先生がいるから。なあ！せ・ん・せ・い！」と俺は郭嘉の肩を叩いた。

郭嘉「やれやれ、仕方ないなあ」と巨大な球体を数個出した。

郭嘉「ハッ！」と大鵬の上に突き上げると球体は空高く舞い上がった。そして、小山の向こう側に入った。敵部隊に堕ちた。すると慌てた声が多く聞こえていた。どうやらあちらはパーティになってるなあ。

龍星「よっしゃ敵さんはお祭り状態だ此方も仕掛けるか」と俺達は敵が混乱状態を見て突っ込んだ。俺は気を右手に集めて思い切り振ると突風が吹き砂埃がたった。

黄巾兵「なんだ、なんだ!？」

黄巾兵2「くそ！何も見えね!」

黄巾兵3「ギヤアア目があああ!？」ますます、混乱していく兵士達、俺は目の前の黄巾兵をぶん殴った。

黄巾兵4「グヘッ!？」と吹っ飛ばされて他の兵士にぶつかった。

龍星「敵襲！敵襲だー！敵が来たぞー!」と声荒げていた。

黄巾兵「な・・・なんだと!」

黄巾兵2「まじかよクソ!」と一人の兵士が剣を抜いて斬りかかった。

黄巾兵3「うお！コノヤロー!」と剣を避けると逆に斬りかかった。それを合図に同士討ちが起きた。

張宝「こ・・・こら慌てるではない！」と一人だけ声をだして混乱を止めようする頭の派手な黄色の帽子を被っている男。俺はそいつ目掛けて走りだした。

張宝「き・・・貴様！」と剣を抜こうとしたが遅い。俺は柄を押さえ赤竜刀を抜刀して一閃！

張宝「ギヤアアア！？あ・・・熱い！！ギヤアアア！？」と切り口から炎が発生し張宝を包み込み一瞬で灰にってしまった。

龍星「敵将！張宝！討ち取ったりー！！！！」

黄巾兵6「ハア！？ちょ・・・張宝様がやられた！？」

黄巾兵7「お・・・俺は逃げるぜえ！？」

黄巾兵8「ま・・・待てよ！」と続々と敵兵が逃げ出した。一方突風が吹いてる場所では突風が止んでいた。

黄巾将「な・・・なんだ！か・・・風が止むとは！？張宝様はどう成されたか！」すると右側から声がしてきた。そちらを見てみると黄巾部隊がコチラに来た。

黄巾将「な・・・なんだ貴様等！何故コチラに来る！早く持ち場に戻れ！」

黄巾兵7「張宝様が討たれたんだよ！もう黄巾はお終いだアアア！」

黄巾将「コラ！逃げるなきさ！報告！敵主力がコチラに雪崩れ込ん

できます！」「何！クソ守備隊はどうした！」

黄巾兵「それが各地で離反する者が出て戦線を維持すること出来ません！」

黄巾将「クソ！黄天を蒼天が喰らうと言うのか！」そのあと官軍主力と激突逢えなく散った。

そして、この出来事が起きる前に龍星達は先に黄巾・首領張角が陣を構える祭壇に向った。

すると、祭壇を守る兵士達がコチラに向ってきた。すると蔡と郭嘉が俺の前に出て敵を足止めに入った。

郭嘉「ここは僕達に任せてもらっよ」

蔡分姫「龍は張角のもとへこの悲しき旋律に終止符を！」と俺は頷き祭壇に向った。

そして、祭壇に向うとそこには奇妙な服装と大きな杖を持った男が立っていた。この人こそ黄巾・首領張角である。すると男から光が出て空中に上がった。

張角「蒼天はすでに燃え尽きておる・・・天意に背く愚者どもよ裁きを受けよ！！」すると祭壇の周りから炎が出てきた。俺は黙って自分の得物を構えた。すると張角は数個の火炎球を出し俺に向ってきた。俺はそれを全て切り伏せた。

張角「キエエイ！」と俺に向ってきた。俺は横に避ける。そして、張角は方向転換し俺に突っ込んできた。杖で攻撃してきたが鐔迫り合いになった。

ギイイイイイ！！

最初はお互い動かなかったが徐々に俺が押し始めた。最後は俺が押し切って後ろ回し蹴りを張角の腹に入れた。

張角「グハア！」と吹っ飛ばされていき炎の壁に突っ込む寸前に空中で止まった。

張角「おのれ！天の奇跡の技とくと見るが良い！」すると透明の兵士が出て俺に攻撃をしてきた。

龍星「ハッ！」

スカッ！と一閃入れたが空振りしてしまった。

龍星「これは！でも、この炎や透明な兵を出すの一人の人間の力では不可能だ。何か仕掛けが有る筈だ。」と俺は辺りを見るといつの間にか祭壇の周りに怪しく光銅像があった。俺は身体に溜めていた気を開放した。

カアアン！気を開放された途端俺の以外の世界がスローモーションに成っていた。そして。

ザアン！

ザアン！

ザアン！

ザアン！と高速移動で銅像を全て斬った。気の開放が終わると全て

の銅像に亀裂が入り崩れていった。

すると張角の身体に纏っていた光は消え地に降りて来た。周りに入
た透明兵は消え。炎の壁も弱まっていた。

張角「な．．なんと云うことだ。まさか凡愚の輩に我が奇跡が！」
その瞬間を俺は見逃すはずも無く。

龍星「セイヤアアアア！」と青竜刀・赤竜刀をを振りかざし斬り
伏せた。

張角「ぐおおおおおんっ！」と斬られた衝撃で吹っ飛ばされた
張角は膝を着いた。俺はゆっくり近づいて。青竜刀を突きつけた。

張角「強き力を持つ者よその力を世に見せ何を成さんとする」と問
いかける張角。

龍星「俺はアンタを超えて未来に進む。」と言うと張角は大笑いを
した。

張角「愚かな蒼天は終わっておるのに未来に進むことなど出来るは
ずが無い。まして一人の力で何が出来る。」と言う。だが俺は。

龍星「ああ、確かアンタの言う蒼天は終わっている。終わっている
物に未来は無い。そして、俺一人の力では到底届かない物だ。だが、
仲間が入れば未来は作ることが出来る。一人でも仲間さえ入ればど
んな逆境さえも超えることが出来る。そう今この国を作るのは天の
奇跡でも英雄でも無い人の絆がこの世を未来を作るのだと！」と俺
は天に届く位に声をだして張角に言った。そしてまた、大笑いをし
て立ち上がった。

張角「ならば、汝が言う仲間と作る未来を天より見てやろう。」と言つと全身に炎が回り一瞬で灰になって消えた。

龍星「張角さん。まあ見ていて下さい。俺が信じる仲間と俺が認めた主と一緒に未来を」と言つと後ろから

???「ほおお主の言う主とはと言う人物だ」と声が聞こえた。

龍星「その人は他人より優れていて昔から何かをする時も型破りな方で現実主義者だ。でも、人の力を信じてそのためにこの乱に立つて人が人として生きれる自由な世を築く人物ですよ」

???「ふん、ならお主も力を貸せ龍よ。」

龍星「承知しました。曹操殿」と振替えて見るとそこには曹操その人がいた。

曹操「龍よ何時ものように「孟徳」と言え」

龍星「分かりました。孟徳殿。何故此方に」と俺が言つと。

曹操「龍見物よ」と少し笑い浮かべ言つた。

龍星「貴方らしいことです。」と苦笑いで言つた。

この瞬間、竜神は黄天を喰らい奸雄との再会を果たした。この瞬間から曹魏の天下の道が始まつた。

黄巾の乱 二章（後書き）

年が開く前に書いてよかった。では、皆様良いお年を！では、また、次回！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4539z/>

無双伝 曹魏天下統一伝

2011年12月31日18時53分発行